

〈論 説〉

## 『夏の夜の夢』論 ——テセウスの二面性をめぐって

恩 田 公 夫

(1)

『夏の夜の夢』はそのすべての筋がアテネの大公テセウス<sup>1)</sup>とアマゾン女人国女王ヒポリタの結婚を外枠として展開することはいまさら言うまでもないことであろう。アテネの四人の若者たちの恋の纏れはテセウスの婚儀の日までに解決されなければならない。夫婦喧嘩中の妖精国の国王夫妻が東方の国から遙々アテネに来たのもテセウスらの結婚を祝福するためである。さらに、ボトムらアテネの職人たちが素人芝居を演じるのもその結婚を祝う余興のためである。すべての筋がテセウスとヒポリタの結婚を軸に展開されるという点で、この二人が「扇の要」の役を果たしているという言い方がされることもある。作品構造の外枠を構成し、かつその中心に位置している二人であれば、シェイクスピアがその性格をどのように描いているか、もっと正確に言えば、彼が二人の性格をどのように描いていると考えるかが、この作品全体の解釈に決定的な影響を及ぼすであろうことは想像にかたくない。

シェイクスピアがテセウスとヒポリタをどのように性格創造しているかを考えるうえで考慮すべき問題が二つある。一つ目は、この二人がシェイクスピアのまったくの創造の産物というわけではなく、ギリシア神話中の登場人物だという点である。とりわけテセウスはヘラクレスにも比すべき偉大な英雄であるばかりでなく、『プルターク英雄伝』ではアテネ建設の祖として、ローマ創建の父ロムルスと対比される伝説中の人物であった。そのため、彼はそれこそ無数の文学作品その他の中で登場したり言及されたりしている。ヒポリタの方はテセウス神話中の一挿話の登場人物にすぎず、彼に比べれば神話中の存在感はずっと薄い。しかし、二人の結婚はテセウスによるアマゾン女人国征服の結果であり、これは母権制に対する父権制の勝利を象徴する重要な挿話であった。<sup>2)</sup> また、二人の間に生まれる一人息子ヒポリトスがたどる悲劇的な運命もやはりテセウス神話の重要な一挿話を構成している。この劇の初演時の観客——その多くがかなりの文学的素養を備えていたはずであるが——には、ある程度共有されたテセウス像、ヒポリタ像があったであろうし、シェイクスピアとしてもそれを無視して二人を描くことはできなかったであろう。『夏の夜の夢』における二人の性格創造を考えるには、こうした事情を念頭に置く必要がある。

二つ目の問題点は、神話中のヒポリタがアマゾン女人国の男勝りで美貌の女王という以上のイメージが描きづらいのとは対照的に、テセウスに関しては、観客と劇作家が共有していたはずの人物像が単純なものではなく、二つの相反するイメージに分裂したものであったろうという点である。ヒポリタについてはギリシア神話中の情報は少ないうえにひどく錯綜している。そもそも、テセウスと結婚したアマゾン族女王の名はアンティオベとするのが一般的であって、ヒポリタとする説は少数派に属する。<sup>3)</sup> 二人の結婚の経緯についても、ヘラクレスとともにアマゾン討伐に参加したテセウスが女王を戦利品としてもらったとする説(これは『夏の夜の夢』でテセウスが「ヒポリタ、私は剣をもってあなたの愛を求め、あなたの心をかち得たのも力づくであった」<sup>4)</sup>と言っているのとはほぼ一致する)がある一方で、アマゾンたちは大勢の美男の戦士がやって来たことを歓迎した、そして女王がテセウスの船に挨拶に来た際、彼が隙を見て船を出帆させ彼女を誘拐したのだ、とする説もある。<sup>5)</sup> 二人の間にはヒポリトスという一人息子が生まれるが、その結婚生活は長くは続かなかったようで、テセウスはその後クレタ王の姉妹パイドラと再婚する。この再婚についても、ヒポリタの死後のこととする説もあるが、そうではなく、棄てられた彼女は嫉妬に狂って結婚の祝宴会場に完全武装で乗り込み、激しい闘いのちにテセウスに殺されたのだ、とする説もある。このようにヒポリタについては、その乏しく錯綜した神話からは、「アマゾン族女王」という言葉が喚起するものであろう「男勝りで勇猛果敢な女性戦士たちの誇り高き女王」という以上のイメージは形成しづらい。その意味では、シェイクスピア当時のヒポリタのイメージも比較的安定した固定的なものであったであろう。

一方、ギリシア神話中のテセウスは自分と従兄弟に近い関係にあるヘラクレスにライバル心を燃やし、さまざまな冒険で多くの怪物を退治した勇敢な英雄である。また父の跡を襲ってアテネの王位に就いてからは、それまで十二の自治体のゆるやかな連合体にすぎなかったアッティカ地方を「王政を廃して民主政を敷く」と約束して一つに纏め、その後のアテネ市発展の礎を築いた英明な君主でもあった。しかしそのような華々しい名望の一方で、彼には次々と婦女を掠奪しては残酷に棄てるという悪癖があった。また非情にも父と息子を死に追いやったとして「親族殺し」の汚名を着せられてもいた。クレタ島でのミノタウロス退治はテセウス神話のなかでもっとも有名な挿話であるが、その中でも彼のそうした暗い側面が顔を覗かせている。「アリアドネの糸」の助けを借りてミノタウロスを倒した後、彼はアテネに戻る途上で結婚を誓ったアリアドネをキプロス島(あるいはナクソス島)に置き去りにした。また彼は、ミノタウロス退治に成功したときには白い帆を揚げて帰還すると父アイゲウスに約束していたにもかかわらず、その約束を忘れて父を失意の自殺に追いやった。『夏の夜の夢』の材源の一つとされるノース訳『プルターク英雄伝』はテセウスの女性遍歴について、「彼の女好きは大きな愛の故ではなく、むしろ肉欲を満足させるためであった」(his womanishness was rather to satisfy lust, than of any great love)<sup>6)</sup>と疑わせると非難している。また父アイゲウスとの約束を不注意にも忘れたことについては、「彼の弁明のためにどんなに雄弁な演説をしたとしても、親殺しの罪を免れるものではない」([Theseus] cannot be cleared of parricide, how eloquent an

oration soever could be made for his excuse)<sup>7)</sup>と断じている。

神話伝説中のテセウスはこのようにまったく相反する二つの面を持ち、一つの統合された人格としてイメージするのがきわめて難しい人物であった。そのために文学作品での彼の扱いは、理性的な支配者、勇敢な英雄として賛美される場合と、不実な恋人、非情な親族殺しとして非難される場合に二分される傾向があった。そしてそれは一人の作家の中で起こることさえあった。例えばチャーサーは、『カンタベリー物語』の「騎士の物語」——これは『夏の夜の夢』の重要な材源の一つとされているが——において、非のうちどころのないテセウスを描いた。そこでのテセウスは「その知謀と武勇によって」(with his wysdom and his chivalrye) (865)<sup>8)</sup>アマゾン女人国を征服した英雄であり、また討ち死にした夫の遺体に対するクレオンの残酷な仕打ちを訴える婦人たちに「憐れみの情」(herte pitious) (953)を示す「心優しき」(gentil) (952)大公である。ヒポリタと結婚後の生活についても、大公は「喜びと榮譽のうちに」(in ioye and in honour) (1028) 残りの生涯をすごした、と述べられている。テセウスがこのように理想化されると軌を一にして、ヒポリタもまた、男性優位社会の価値観から見て理想的な妻として描かれている。彼女はアマゾン族の「美しく勇猛な女王」(the faire hardy queene) (882)であったが、結婚後はパラモンとアルシーテに対する死罪判決を聞くと直ぐに「真の女らしさから」(for verray wommanhede) (1748) 涙を流す。「騎士の物語」では、テセウスがやがてパイドラと再婚し、そのパイドラの讒言によって息子ヒポリトスを死に追いやることになるという暗い未来は完全に無視されている。しかし、このように理想化されたテセウスを描いたチャーサーであるが、彼が『カンタベリー物語』の直前に書いた『善女伝』中の「アリアドネ伝」では、まったく違うテセウスを、結婚の約束を反故にして身重のアリアドネを置き去りにする残酷で不実な恋の遍歴者としてのテセウスを、描いている。チャーサーにおいてはあたかもテセウスという名を共有しながらまったく違った性格を持つ二人の人物がいるかのようである。

このようにヒポリタのイメージが比較的安定したものだものに対し、テセウスのイメージは大きく二つに分極化したものだった。では、『夏の夜の夢』ではそのテセウスの二面性はどのように処理されているのだろうか。「騎士の物語」のように、彼は完全に理想化され、そのマイナス・イメージは無視されているのだろうか。あるいは、彼のマイナス・イメージが強調され、ヒポリタとの結婚に暗い影を投げかけているのだろうか。これは『夏の夜の夢』全体の解釈に大きく影響を与える問題である。

## (2)

『夏の夜の夢』においてテセウス神話が重要な役割を果たしていることをその論文の中心テーマとして取り上げたのは、Paul A. Olsonがおそらく最初であった。1957年に発表された論文<sup>9)</sup>においてOlsonは、チャーサーの「騎士の物語」をはじめとする数多くの作品を引き合いに出しながら、シェイクスピア当時、テセウスとヒポリタがそれぞれどのようなイメージで捕らえ

られていたかを推測している。Olsonによればシェイクスピアが『夏の夜の夢』を書くはるか以前に、テセウスは「理性的な男にして自らの下等な本性と臣民の理想的な支配者」(the reasonable man and the ideal ruler of both his lower nature and his subjects)<sup>10)</sup>の体現者となっていた。他方、ヒポリタが支配するアマゾン族は「結婚生活における安定的な上下関係を覆し」(overturned the fixed hierarchy of wedlock)、<sup>11)</sup>「非女性的な振る舞い」(unwomanly conduct)<sup>12)</sup>によって「伝統的な秩序を侵害」(a violation of that traditional order)<sup>13)</sup>する民族であり、「下等な女性的情欲による男性的理性の本分の不法侵害」(a false usurpation of the duties of male reason by the lower, female passion)<sup>14)</sup>を象徴する存在であった。したがって、シェイクスピアにとっても、また初演当時の観客にとっても、テセウスは「あまりに気性の激しい女王」(an all-too passionate queen)<sup>15)</sup>を屈伏させ、結婚生活におけるあるべき男女の上下関係へと導く「秩序の王」(King of Order)<sup>16)</sup>であった、とOlsonは論じた。

Olsonのこの論文は発表当時は大した反響を呼ばなかったようである。彼の論文はその当時のほとんど誰もが当然と思っており、したがって敢えて声高に主張しようなどとはしなかった『夏の夜の夢』の伝統的なテセウス観を改めて明示し、それを補強しただけという面を持っていたのかもしれない。しかし、いささか長い沈黙ののち、1974年、初期のフェミニズム批評家D'Orsay W. Pearsonが猛然とOlsonに異を唱えた。“‘Unkinde’ Theseus: A Study in Renaissance Mythography”と題された論文<sup>17)</sup>において、Pearsonもまたシェイクスピア当時のテセウス観を探るために、オヴィディウスからルネッサンス期にいたるまでの文学作品でのテセウスの扱われ方を調べたが、彼女はとりわけ彼の女性遍歴の描かれ方に注目した。当然、チャーサーからは『善女伝』が考察の対象に選ばれた。その上で彼女はこう断じた。

[Theseus'] classical, medieval, and Renaissance image as an unnatural, perfidious, and unfaithful lover and father far outweighed either his accomplishment in organizing the demes of Athens into a single political unit or his reputation as an icon of the virtue of friendship....Whether in translation, in the original, or through allusion, then, the image of Theseus available to the Renaissance was hardly one of total reason and honor. His exploits during his early youth may have been admirable, but the composite portrait which can be derived of him in his maturity is hardly one which will support Olson's contention that he is an icon of reason which has triumphed over sensuality.<sup>18)</sup>

そして、Pearsonはこのような非情で不実なテセウスの方がOlsonの理想化されたテセウスよりも『夏の夜の夢』で描かれている人物によく当てはまると主張し、この作品の徹底的な読み直しを行った。

例えば、以下に引用する『夏の夜の夢』冒頭のテセウスの台詞について、PearsonはOlsonとは対照的な読み方をしている。

さて、美しいヒポリタ、われらの婚儀の時も  
 急速に近づいている。楽しい日々をあと四日すごせば  
 新月の宵となる。だがなんとのろのろしていることか、  
 この古い月の欠けていくのが。私の望みをなかなか  
 かなえさせてはくれぬ、継母や未亡人がいつまでも  
 生きながらえて若者に譲るべき財産を朽ちさせるように。

Now, fair Hippolyta, our nuptial hour  
 Draws on apace. Four happy days bring in  
 Another moon—but O, methinks, how slow  
 This old moon wanes! She lingers my desires  
 Like to a stepdame or dowager  
 Long withering out a young man's revenue.

(I.i. 1-6)

Olson にとっては、テセウスはこの劇が始まる前にすでに「秩序の王」である。なるほどここに描かれるテセウスは自分の「望み/性欲」(desires)に苛立ってはいる。しかしそれは彼の「秩序」を脅かすものではない。彼は狂気の女神ヘカテと結びつけられる「古い月」が、貞潔の女神シンシアと結びつけられる「新月」へと変わることを、言い換えれば自然に時が熟して結婚の儀式を行うのにふさわしくなるのを忍耐強く待っている。テセウスは自らの「望み/性欲」をしかるべき儀礼を経て、結婚という文化的制度の中で満たそうとしている理性的な支配者である、というのが Olson の読み方である。一方、Pearson はまったく違ったテセウスを読み取る。彼女によれば、“desires”という語はルネッサンス期においては「肉欲」(lust)と同義語である。さらに、「(継)母が長生きして遺産を細らせることに苛立つ若者」というイメージは、テセウスの「愛の強欲」(love avarice)<sup>19)</sup>と「忘恩」(ingratitude)<sup>20)</sup>を物語っており、それらは彼の女性遍歴における悪評を裏書きするものである。

Pearson はこのようにして、『夏の夜の夢』の現代の観客(読者)の意識に上ることのなかったテセウスのいわば負の側面を次々に指摘していく。そして、彼女によるこの劇の最後の場面の分析は、この作品に対する従来的一般的な見方、すなわち、誰か高名な貴人の結婚を祝うために創作もしくは改作された祝婚劇であり、「[シェイクスピアの] 幸福な喜劇の中でも間違いなくもっとも幸福な喜劇」(certainly the happiest, of all the Happy Comedies)<sup>21)</sup>という伝統的な見方に、根本的な修正を迫るものであった。オベロンが妖精たちを引き連れて登場し、歌と踊りでテセウスとヒポリタら三組の新郎新婦を祝福する場面は、祝婚劇としての『夏の夜の夢』の最後を飾るにふさわしい祝祭的な気分を満たされたものと見なされてきた。しかし Pearson は、結婚後のテセウスの物語を知っていた初演当時の観客にとっては、この場面は劇中もっとも皮肉な場面だった可能性があると言う。彼女はオベロンの次の言葉を問題にする。

われら二人は新床を  
 訪い授けよう、祝福を。  
 そこで生まれる子供らに  
 永久のしあわせあるように。  
 三組の夫婦ともどもに  
 永久の愛情あるように。  
 To the best bride bed will we,  
 Which by us shall blessed be,  
 And the issue there create  
 Ever shall be fortunate.  
 So shall all the couples three  
 Ever true in loving be.

(V.i. 394-99)

神話中のテセウスとヒポリタの結婚が「永久の愛情」に満たされたものでなかったことは、経緯はどうあれ、テセウスがパイドラと再婚していることで明らかである。二人の間に生まれたヒポリトスがたどる運命も「永久のしあわせ」に恵まれたものでは決してなかった。彼は父の再婚相手パイドラに邪恋を抱かれ、彼女の讒言を軽信した父の呪いを受けて、自分の乗っていた馬車の馬たちに身を引き裂かれて死ぬという無残な最期を遂げる。もちろん劇中にヒポリトスは登場しないし、彼の名前が言及されることもない。しかし Pearson は、シェイクスピアがテセウスの結婚相手のアマゾン族女王の名を、より一般的なアンティオペではなくヒポリトスの女性形であるヒポリタとすることで、観客にこの結婚から生まれる息子の悲劇的な運命を意図的に思い出させようとしたのかもしれないと指摘している。<sup>22)</sup>

Pearson はこのように当時の観客にとっては馴染み深い、しかし現代の観客（読者）にとっては気づきづらい、テセウスの負の側面を、テセウス神話に逆上することで言わば「発掘」して見せた。以後、『夏の夜の夢』のテセウスについて論じようとする者は、彼の負の側面に対して、完全無視という選択も含めて、何らかの反応を示さざるを得なくなったと言ってよい。例えば、1979年出版のアーデン版『夏の夜の夢』の編者 Harold F. Brooks はテセウスを「理性的な秩序」(rational order)<sup>23)</sup>の象徴と見なし、彼とヒポリタの間には成熟した愛情があると主張している伝統派であるが、作品中で言及されるテセウスの昔の不行跡については、「ある欠点が無視できないほど知れ渡っている場合には、それはできるかぎり好意的に触れられる必要がある、という称賛文を書く際の教訓に従って」(according to the precepts of panegyric: if a defect is too well known to be ignored, it must be brought in as favourably as possible)<sup>24)</sup>処理されている、と述べている。

Mary Ellen Lamb はテセウスの二面性ともっと真正面から対峙し、その二面性を統一するた

めに「改悛した女泣かせ」(reformed heartbreaker) というテセウス像を提示した。<sup>25)</sup> 1979年発表の論文の中で Lamb は、『夏の夜の夢』においてテセウスの恋愛面での不誠実さ、残酷さが強調されていることを認めている。しかし、彼女は Pearson のように、それがこの劇に皮肉な一面を加えていると見なすことはしない。彼女によれば、テセウスはそのような恋の迷妄を克服してそれを過去のものとしており、彼の過去の不誠実さはむしろ現在のヒポリタとの幸福な結婚を対照によって際立たせているのである。Lamb のこうした読みは、テセウスの二面性を認めた上で、それを喜劇の枠組みの中に納まりやすいように統一しようとする試みであった。しかし、「改悛した」テセウスの幸福な結婚という読み方をして行くと、どうしてもオベロンがテセウスの新床を祝福する場面で躓く。Lamb 自身も、それまでテセウス神話の暗い、負の側面を強調してきただけに、この場面が孕み持っている不吉な意味合いに触れざるを得ず、こう述べている。

Oberon's blessing on the marriage bed of Theseus and Hippolyta is perhaps the playwright's request of the audience not to recall [Theseus' murder of his own son Hippolytus]; yet denying it has the paradoxical effect of bringing it forcefully to mind.<sup>26)</sup>

彼女は、不実で残酷な恋人というテセウス像がこの劇に皮肉な影を投げかけているという Pearson の解釈には反論したが、この最後の場面については、テセウス神話の暗い側面が影を落としていることを認めざるを得ないのである。

『夏の夜の夢』を解釈するうえでのテセウス神話の重要性については、その後もかなりの批評家たちによって指摘され、特にその負の側面の反映を作品中に読み取る研究が多く発表されてきた。<sup>27)</sup> それは、これまであまりにも長い間テセウスの負の側面が見落とされてきたことへの当然の反応であって、これからもそうした試みは続くであろう。しかし、神話上のテセウスの二面性が『夏の夜の夢』のテセウスにどのように反映されているかについて、それを中心テーマに取り上げている論文は、上の Lamb 以降見当たらないようである。この辺で、一度立ち止まり、テセウスの二面性が『夏の夜の夢』のなかでどのように処理されているのかを考えてみる必要があるのではないだろうか。

### (3)

『夏の夜の夢』におけるテセウスの描き方の特徴は、彼の理想化された面が前面に出ており、その暗い、負の面は背後に隠れている、という点である。時には彼の残酷な前歴が表面化することもあるが、それはたちまち押さえ込まれ、背後に追いやられてしまう。劇中、テセウスの悪名高い「女性遍歴」について直接言及されている箇所がある。夫婦喧嘩中のオベロンが非難めいた口調でタイタニアに問い質す。

おまえだろう、あの男 [テセウス] を、星あかりの夜おびき出して、  
 掠奪されて彼のものとなっていたペリグネと別れさせたのも、  
 あの男に美しいアイグレとの誓いを破らせ、  
 アリアドネやアンティオペを捨てさせたのも。

Didst not thou lead him through the glimmering night  
 From Periguna, whom he ravished,  
 And make him with fair Aegles break his faith,  
 With Ariadne and Antiopa?

(II.i. 77-80)

ここではテセウスの不実な女性遍歴が語られているものの、それはタイタニアの責任に転嫁されている。タイタニアは「それはみんな嫉妬が生んだこしらえごとです」(These are the forgeries of jealousy) (81) と言下に否定するが、真相は藪の中である。さらに、タイタニアのこの言葉は第一義的には自らの関与を否定したものであろうが、テセウスの残酷な所業自体を否定したものと解釈することも可能であろう。このように、テセウスの女性をめぐる悪名高い前歴は、語られつつも曖昧化され、抑圧されている。

【夏の夜の夢】に登場するアイゲウスとヘレナの二人は、神話のなかではテセウスの負の側面との結びつきが強い人物である。劇中での二人は表向きはそのような結びつきからは切り離されているが、その一方でそれを仄めかす。神話中のアイゲウスは言うまでもなくテセウスの父であって、息子の「不注意」がもとで自殺に追い込まれる人物であるが、劇中ではハーミアの父として登場する。その意味では劇中のテセウスは「父殺し」の罪から解放されている。しかし、劇中のアイゲウスは、自分が婿に選んだデメトリアスとの結婚を拒んでライサンダーと駆け落ちしようとしたハーミアに、死の裁きをとテセウスに求めると、それを却下されてしまう。法によって保証された家父長としての権利を主張する彼の意思は、「アイゲウス、お前の希望は抑えさせてもらうぞ」(Egeus, I will overbear your will) (IV.i. 178) という一言で圧殺されてしまう。象徴的な意味においてはあがあるが、テセウスはアイゲウスを殺すのである。<sup>28)</sup> 神話中のテセウスとアイゲウスの関係は、劇中では表面上隠されつつ、その実仄めかされている。

同様のことはヘレナについても言える。ヘレナという名はヘレンとともにギリシア語のヘレネに由来する。ギリシア神話中のヘレネは言うまでもなくトロイ戦争の原因となった絶世の美女であるが、彼女は12歳のとき、自分の花嫁にと願うテセウスに掠奪されたことがある。『プルターク英雄伝』は、このときのテセウスはすでに壮年を過ぎ、法に適った結婚がもうできない年齢になっていながら幼い未熟な少女ヘレネを誘拐した、と言って非難している。<sup>29)</sup> ヘレネ誘拐は、アリアドネを棄てたことと同じくらい、テセウスの評判を下げている悪行であった。無論、劇中のヘレナは神話中のヘレネとは直接の関係はない。そもそも彼女は、ハーミアに心変わりした恋人デメトリアスに棄てられる役回りであって、絶世の美女などではないように描か

れている。しかし、夜の森で、妖精の魔力によってヘレナに恋心を戻したデメトリアスは彼女に次のように呼びかけて、彼女の名と神話中のヘレネの結びつきを仄めかす。

おお、ヘレン、女神、森の精、非の打ち所のない、天使。

O Helen, Goddess, nymph, perfect, divine!

(III. 2.137)

ギリシア神話のヘレネ (Helene) は英語ではヘレン (Helen) と表記されるのが常なので、ここでヘレナ (Helena) の語尾の a が落ちることで、劇中のヘレナと神話中のヘレネとの結びつきが一層強化されている。“Goddess, nymph, perfect, divine” という神々しいばかりの美しさを讃える形容辞もまたその強化に一役買っていることは言うまでもない。<sup>30)</sup> しかし、このように神話中のヘレネが強く仄めかされるのは一瞬のことであって、すぐにヘレンはヘレナに戻る。また仄めかしはいくら強化されようが飽くまでも仄めかしなのであって、ヘレナが明示的にヘレネに驚えられているわけではないことにも注意すべきであろう。ヘレネの名はヘレナという名の背後に隠れたままであって、表面化することは決してないのである。

シェイクスピアが『夏の夜の夢』を書いたとき、ハーミアの父親とデメトリアスの結婚相手の娘の名前の選択肢は、それこそ無限にあったはずである。それをアイゲウスとヘレナという、テセウス神話の暗い負の側面を想起させる名前にしたことは、劇作家の作為を感じざるを得ない。そして、上で少し触れたように、同様の作為はテセウスの花嫁の名前の選択についても言える。シェイクスピアがこの作品を書くにあたって参考にした重要な材源の一つとされるチョーサーの『カンタベリー物語』の「騎士の物語」では、テセウスの結婚相手のアマゾン族女王は「イポリタ」(Ypolita) (881) となっているが、やはり重要な材源であるノース訳『プルターク英雄伝』ではアンティオベとなっており、ヒポリタは異説として紹介されているに過ぎない。シェイクスピアには二つの選択肢があったことになる。しかし、Pearson によればシェイクスピアが利用できたであろうその他多くの材源を調べていくと、テセウスの結婚相手としてはアンティオベの方がはるかにしばしば引き合いに出されていたという。<sup>31)</sup> 彼女の指摘が正しければなおのこと、またたとえそれが多少の誇張を含んだものであったにせよ、シェイクスピアが、悲劇的な運命をたどるヒポリトスの名を想起させるヒポリタの方を選択したことは、Pearson が言うようにやはり作為を感じざるを得ないであろう。<sup>32)</sup>

ヒポリタ (Hippolyta) という名前はヒポリトス (Hippolytus) という名前の語尾を女性形にすることで作られた「逆成語」(back-formed word) であり、二つの名前は密接に結びついている。さらにヒポリトスという名は「馬に滅ぼされし者」(destroyed by horses) という意味を持ち、それは彼の悲劇的な死に方——その死がテセウスのパイドラとの再婚に起因することはすでに述べた——に因んでつけられた名前である。ヒポリタという名前には、不吉な運命を刻印されたヒポリトスという名前が切り離しがたく張りついていることになる。しかし、こ

でもまた、ヒポリトスはヒポリタの影に隠れており、決してテキスト上に姿を現すことはない。オペロンによる新床の祝福の場面と同様に、彼の名はヒポリタを通じて仄めかしはされるものの、直接的に言及されることはないのである。

以上のように、『夏の夜の夢』ではショーサーの「騎士の物語」のように、テセウスの暗い負の側面が完全に浄化されてはいない。しかしその負の側面は、前面の理想化されたテセウス像を直接侵害するようには描かれていない。アイゲウス、ヘレンというテセウスの負の側面と強く結びつく名前が劇中に現れるものの、それらはそれぞれハーミアの父親、デメトリアスの恋人へと「移動」(displace)され、理想化されたテセウスを侵害する力を弱められている。ヒポリトスもヒポリタの背後に隠れており、表に現れることはない。テセウスの悪名高い女性遍歴はその責任をタイタニアに転嫁されるか、そもそも存在さえしないものとされていた。ただ、ここで注意すべきことは、シェイクスピアがテセウスの負の側面を想起させる要素を最初から除去してしまうのではなく、さり気なく、しかし明らかに作為的にテキストの中に組み込んだうえで、それらを抑圧しているという点である。見せつつ隠す、あるいはそれと結局は同じことなのだが、隠しつつ見せる、それがテセウスの負の側面の処理に関するシェイクスピアの戦略であるように思われる。

#### (4)

このように『夏の夜の夢』におけるテセウスにおいては、その二面性は Lamb が主張したように「改悛した女泣かせ」として一つに統合されるのではなく、正にその二面性がそのまま保たれている。作品全体に渡ってテセウスの理想的な側面が前面に出され、その一方で、テキスト中に散種されたアイゲウス、ヘレン、ヒポリタ、アリアドネといった記号が彼の負の側面を仄めかす、という複雑にして巧妙な方法が採られている。では、このように描かれたテセウスの二面性は、この作品全体の解釈にどのような影響を与えるであろうか。現代の観客とは違い、初演当時の観客たちはさまざまな文学的資料を通してテセウス神話に親しみ、その負の側面にも通暁していたはずである。したがって、彼らは『夏の夜の夢』を観ているとき、テセウスの残酷な過去や暗い未来の仄めかしに対して、かなり敏感に反応できたと思われる。一方ではヒポリタとの結婚で幸福の絶頂を迎えている勇敢にして理性的な英雄としてのテセウスが見えている。ときおり、その背後に、多くの人々を不幸に追いやり、当然の報いとして薄幸の後半生を送ることになる残酷なテセウスが顔を覗かせる。観客は一瞬、そのどちらのテセウスに焦点を合わせればよいのか分からないという戸惑いを経験したことであろう。この戸惑いは、この作品をただの「幸福な喜劇」と見なすべきか、それとも悲劇的な要素を含んだ何かもっと「深刻な喜劇」と見なすべきか、という戸惑いでもあったであろう。そして、論者には、観客にまさにそのような戸惑い、眩暈にも似た遊戯性に満ちた戸惑い、を経験させることこそが、シェイクスピアの狙いだったのではないかと思われてならない。

アテネ郊外の森で妖精たちの魔術に翻弄されながら夜をすごした四人の若者たちは、朝が来て目覚めたとき、その夜の出来事が夢か現実か分からなくなっている。ハーミアはその戸惑いを次のような言葉で表現している。

なんだか、二つの目で別々に眺めているよう、  
 なにもかもが二重に見えるんですもの。  
 Methinks I see these things with parted eyes,  
 When everything seems double.

(IV.i. 188-89)

シェイクスピア当時の観客たちは、『夏の夜の夢』のテセウスに関して、そしてこの作品全体に関しても、ハーミアと同じような感想を持ったのではないか。そして、それこそがシェイクスピアの狙いだったのではないか。次に引用するように、この劇冒頭の正に第一行目に、アマゾン族征服というテセウスの輝かしい武勲を象徴するとともに彼の不吉な未来を暗示してもいる「ヒポリタ」の名が現れていることは、論者をそうした思いに誘うのである。

さて、美しいヒポリタ、われらの婚儀の時も  
 急速に近づいている。  
 Now, fair Hippolyta, our nuptial hour  
 Draws on apace.

(I.i. 1-2)

(注)

- 1) “Theseus, Duke of Athens”は英語での発音にしたがって「アセンズの大公シーシアス」と訳するのが一般的であるが、本論ではシーシアスがギリシア神話中の登場人物であることを明示するため、敢えてテセウスと表記する。他の固有名詞についても適宜同様の処理をしているが、いちいち断ることはしない。
- 2) アマゾン女人国は母権制社会であり、彼らは処女神アルテミスを崇拝し男との接触を拒みながらも、他方では子孫を残す必要からときおり近隣の部族の男たちと乱交を行った。この一見矛盾するような習俗はしかし、父権制を支える結婚という文化的制度を拒否しているという点で、一貫したものであった。cf. Page duBois, *Centaur & Amazons: Women and Pre-history of the Great Chain of Being* (The Univ. of Michigan Press, 1991), p. 34.
- 3) 『夏の夜の夢』の重要な材源の一つとされるノース訳『アルターク英雄伝』では、ヒポリタ説は次のように一歴史家の唱える異説として紹介されているにすぎない。“For this Historiographer [Clidemus] calleth the Amazone which Theseus married, Hyppolita, and not Antiopa” (Geoffrey Bullough, *Narrative and Dramatic Sources of Shakespeare*, Vol. I [Routledge, 1957], p. 387).

- 4) “Hippolyta, I wooed thee with my sword,/ And won thy love doing thee injuries” (I.I. 16-17). なお、シェイクスピアからの引用、行数表示はすべてオックスフォード版 (Peter Holland ed., Clarendon Press, 1994) による。訳文の作成にあたっては、主に小田島雄志訳『シェイクスピア全集 III』(白水社, 1975) を参照した。
- 5) ヒポリタとの結婚の挿話を含めて、テセウス神話を概観するにあたっては主に次の四著を参照した。河野与一訳『プルターク英雄伝(-)』(岩波文庫, 1952), マイケル・グラント&ジョン・ヘイゼル『ギリシア・ローマ神話事典』(西田実主幹, 入江和生他共訳) (大修館書店, 1988), ロバート・グレイヴズ『ギリシア神話』(高杉一郎訳) (紀伊国屋書店, 1998), カール・ケレーニイ『ギリシアの神話—英雄の時代』(植田兼義訳) (中公文庫, 1985)。
- 6) Bullough, p. 388. なお、訳文の作成にあたっては、前掲の河野与一訳『プルターク英雄伝(-)』を参照した。
- 7) この箇所は前掲の Bullough では省かれているため、Peter Holland, “Theseus’ Shadows in *A Midsummer Night’s Dream*,” *Shakespeare Survey* 47 (Cambridge Univ. Press, 1995), pp. 139-151 における引用 (p. 146) によった。
- 8) 『カンタベリー物語』からの引用、行数表示はすべて John M. Manly & Edith Rickert ed., *The Text of The Canterbury Tales*, Vol. III (The Univ. of Chicago Press, 1940) による。
- 9) Paul A. Olson, “*A Midsummer Night’s Dream* and the Meaning of Court Marriage,” *English Literary History*, 24 (1957), pp. 95-119.
- 10) Ibid., p. 101.
- 11), 12), 13), 14) Ibid., p. 102.
- 15), 16) Ibid., p. 103.
- 17) D’Orsay W. Pearson, “‘Unkinde’ Theseus: A Study in Renaissance Mythography,” *English Literary Renaissance* 4 (1974), pp. 276-298.
- 18) Ibid., p. 276, p. 278.
- 19), 20) Ibid., p. 292.
- 21) John Dover Wilson, *Shakespeare’s Happy Comedies* (Northwestern Univ. Press, 1962), p. 184.
- 22) Pearson, pp. 296-97.
- 23), 24) Harold F. Brooks ed., *A Midsummer Night’s Dream*, New Arden Shakespeare, (Methuen, 1979), p. ciii.
- 25) M.E. Lamb, “*A Midsummer Night’s Dream*: The Myth of Theseus and the Minotaur,” *Texas Studies in Literature and Language*, Vol. 21, No. 4 (1979), pp. 478-91. なお、“reformed heart-breaker” という表現は p. 482に出ている。
- 26) Ibid., p. 486.
- 27) 例えば、フェミニズム批評の立場からは Shirley Nelson Garner, “*A Midsummer Night’s Dream*: Jack shall have Jill:/ Nought shall go ill,” *Women’s Studies* 9 (Gordon and Breach Science Publishers, 1981), pp. 47-63, 新歴史主義の立場からは Louis Montrose, “The Shaping Fantasies of *A Midsummer Night’s Dream*,” *The Purpose of Playing* (The Univ. of Chicago Press, 1996), pp. 109-205 などがある。
- 28) Montrose は前掲書のなかで、次のように述べている。“By choosing the name of Theseus’s father, Egeus, for the Athenian patriarch whose will is overborne by the Duke, Shakespeare effects a displacement within his comedy of Theseus’s negligent parricide” (p. 148).

- 29) Bullough, p. 388.
- 30) ヘレナとヘレネの結びつきに関しては, James L. Calderwood, *A Midsummer Night's Dream*, Twayne's New Critical Introductions to Shakespeare (Harvester Wheatsheaf, 1992) pp. 83-84 を参照。
- 31) Pearson, pp. 296-297.
- 32) ヒポリタとヒポリトスの結びつきについては, Pearson 以外に, Calderwood, p. 5, Montrose, p. 149, Holland (1995), pp. 219-20 を参照。